

授 業 科 目 の 概 要			
(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎 獣医 保健 看護学 分野	動物感染症学特論	(1 福所秋雄)動物疾病のうち、特に感染症は病原体の感染に起因するものであり、寄生虫、原虫、細菌、リケッチャ、ウイルス等、その病原体が多岐に亘る。これら個々の感染症の病態、診断、予防、並びに疫学の知識を細部に亘って十分に習得させると共に、診断のための検査技術、疫学的手法による感染症防疫の在り方を教授し、これらの感染症分野での各種技術開発に向けた研究能力を引き出す。また、感染症は動物を扱う限り、避けては通れないものであり、臨床看護に携わる技術者にとって、特に手術前後の病原体の消毒・滅菌等の措置の重要性の認知並びに動物病院内感染の防除に関する対応等の能力を養う。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	野生動物医学特論	(3 梶ヶ谷博)野生動物は本来人類と切り離されたところで生活を営むべき存在であるが、この1, 2世紀あまりにおける人類の生活領域の拡大は、むしろ人類と野生動物との接触機会を増大させており、結果として野生動物側からみれば、人間活動の影響が傷病野生動物を作り続けているのが現実である。そこに野生動物と人類との共生に関わる現代的な基礎理論の構築が求められる理由がある。ここでは共生理論の一部を構成する、人間と比較的関わりが大きい野生動物起源の疾病の保健衛生(集団)と、傷病野生動物の健康回復への手助け(個体看護)の在り方について考察する。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物看護生理学特論	(5 袴田陽二)動物生理学とは動物の体の機能を学ぶ学問で、獣医保健看護学において最重要の基礎学問である。授業では、生理学の他に解剖学、組織学、生化学、分子生物学等の基礎医学も適宜取り入れ生体の正常機能を総合的に教授する。さらに、動物看護が生理機能に及ぼす影響と治癒的効果を解析するための実験方法の理論などを教授し、臨床動物看護における動物生理学の総合的、かつ実践的な知識を養う。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	分子遺伝学特論	(6 近江俊徳)動物看護の現場でしばしば遭遇する遺伝的疾患を有する動物について、責任遺伝子の同定法や構造ならびに診断法など遺伝子変異、染色体異常に起因する疾患機序を総合的に学修し、動物の飼育主に対して遺伝子病の機序、診断法などを正しく説明する能力、自ら遺伝子疾患を解析する実験方法の理論などを教授する。 (全2単位 1回2時間 15回)	

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎 獣医 保健 看護 学 分野	公衆衛生学特論	(7 小林真理子)公衆衛生学とは、社会を構成する人々の健康を肉体的、精神的、社会的に良好に保持、増進させることを目的とした自然科学系、社会科学系に大別される広範な学問分野を含んだ応用科学であり、その最終的な目的は動物保健看護領域においても同じである。本特論では人獣共通感染症の現状、食品衛生、特に動物性食品に関する衛生、動物の関与する環境衛生ならびに人と動物の共生の視点から、ヒトの精神衛生に動物がどのように関与するかを解説する。さらに、疫学的手法による解析方法や、動物保健看護公衆衛生における疫学的手法を教授する。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物微生物学特論	(10 青木博史)動物保健看護領域において、動物およびヒトを微生物による健康被害から守ることは重要かつ必須である。それらを恒常的に達成・発展させる力を養うことを目的として、各種微生物の生物性状、遺伝子構造および分子微生物学的特性などを深く追求し、微生物現象を体系的に学修する。さらに、それらから導かれる病原・血清診断法、予防法、治療法、微生物コントロール法などを理解し、微生物および動物保健衛生などに係る観察力、考察力、判断力および研究能力を養う。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物生態学特論	(11 山本俊昭)地球上に生息する動物には、様々な「進化」の過程を辿り分化した、哺乳類、鳥類、昆虫、魚類、は虫類、両生類など種の数には多数にのぼる。本講義では動物の生態を多方面から学修することにより、多種多様化するペットの飼育・看護のあり方について学ぶ。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	基礎獣医保健看護学特別演習	(概要)最新の分子レベルでの生体機能解析法としてのcDNAマイクロアレイ、RNAインターフェレンス、プロテオミクス、細胞および動物個体における分子動態イメージ解析法の原理と実験法を修得させ、動物の生理機能の解明を目指した研究の実践、指導を行い、その総括として修士論文の作成を指導する。各指導教員の具体的なテーマを以下に記する。 (オムニバス方式/全4単位、1回4時間 計30回開講) (1 福所秋雄/12回)動物微生物学・動物感染症学を視点にした、治療獣医保健看護学・予防獣医保健看護学の修得を目的に、産業動物、コンパニオンアニマル、野生動物、エキゾチックアニマル等の感染症に関する診断・予防技術の研究開発の思考力を養う演習を実施する。実際には、最先端の論文事例を参考に、実験の進め方、考え方並びに発表の仕方等を修得させ、獣医保健看護学教育の一端を学ぶ。	オムニバス形式

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
基礎 獣医 保健 看護学 分野	基礎獣医保健看護学特別演習	(4 梶ヶ谷 博/6回)演習は、比較動物形態学の立場から生物の形態の意味について論じた内外の著作・論文を題材とする。特に鳥類の運動系組織と呼吸系組織の構造に注目し、飛翔不能状態に陥った事例における病理発生の理論的な組み立て手法をシミュレーション演習するとともに、関連事例における個体看護の合理的な処置について学ぶ。		
		(5 袴田陽二/6回)動物看護生理学特論で習得した知識を活かして、動物生理学に関する原著論文や実験的手法を取り入れた演習を行う。特に、疾患モデル動物を用いた治療実験を行い、病気の成り立ち、治療と看護の体験を通し、実験の進め方、得られた結果のまとめ方とその解釈について討議し、研究能力を養う。		
		(6 近江 俊徳/6回)国内外の遺伝性疾患動物の数、疾病の種類、品種、遺伝子変異の種類、および看護の取り組み方について文献の検討や事例を用いて検討し考察する。		
	基礎獣医保健看護学特別研究	(概要)獣医看護学分野は動物医療分野の新しい分野であり、獣医看護学研究を進めるにあたり、系統立った基礎看護学を構築する必要がある。そのため、臨床看護研究の基礎となる、遺伝学を背景とする生理学、実験動物学、微生物学、感染症学、生態学、病態学、生体構造学等を学習・実践し、研究能力を養う。 (全8単位、1回6時間計60回開講)		
		(1 福所秋雄)微生物学、病態学、遺伝学等に基づく、感染論、疾病論、防疫論を学習させ、感染症の診断・予防・防疫に係る技術研究開発能力の向上を図る。具体的には、病原体の病原性発現に係る病原体・宿主要因の解析、遺伝子・蛋白解析による次世代ワクチンや診断技術の開発等を実施する。		
		(4 梶ヶ谷 博)野生鳥類における傷害発生とその個体に及ぼす影響について、野外実例を対象として次の課題で研究を進めている。1:骨組織の破壊発生のメカニズム、2:骨格筋傷害が運動障害に及ぼす影響、3:野鳥の傷害事例に対する地理情報システムを用いた解析、4:内臓損傷の発生機転、5:飛翔事故と体内素因との関連性		
	(5 袴田陽二)ラット、マウスを対象に生体における遺伝子の機能解析と遺伝子治療を目指して以下の研究を行っている。 1) 遺伝子組換え動物の作成と解析 2) naked-DNAを用いた遺伝子導入法による遺伝子治療の開発 3) 組織幹細胞を用いた臓器再生研究 4) 研究資源の保存と有効利用のためのシステムの開発			

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床 獣医 保健 看護学 分野	実践動物看護学特論	(2 左向敏紀)実践的動物看護学を学問的に高めて行くには、現在実践されている看護学を検証し不足部分な点を補い発展してゆく必要がある。1)海外での現状と国内の現状比較および人の看護学研究と動物看護学の応用を進める。2)動物における疾病の病態を理解し、その病態に必要な看護学の理解、充実のための研究を理解させる。3)獣医学をサポートする臨床検査および種々検査学の進歩を究めてその応用を勧める。また、病理組織学的検査技術も時代と共に進歩している。それらに貢献すべき方法の開発研究も必要である。4)科学的エビデンスの少ない行動学を確実な科学的データを積み上げるべく方法論の開発を行う。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物看護病態学特論	(3 湯本典夫)動物の様々な疾患のうち、代謝疾患、生体防御機構の統御と破綻、炎症性疾患及び腫瘍を取り上げ、疾病の原因、発症の機序、病気の表現を病理形態学及び分子病理学の面から講義する。また対称疾患の最新の知見を紹介し、最先端の研究方法及び技術及び知識を習得させる。これにより疾病に関する知識、研究基礎能力を培い、看護診断、援助及び教育に応用することを理解する。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物看護代謝学特論	(8 石岡克己)伴侶動物の代謝に関わる様々な病態について、以下のテーマに焦点を当てて学ぶ。1)脂肪細胞で産生され、全身の代謝を調節している各種アディポカインについて、分子構造や体内動態を研究する。2)エネルギーを熱に変換する脱共役蛋白質(UCP)のはたらきや、それを応用した新しい肥満治療法について研究する。3)栄養代謝の出発点である消化管に発生する様々な病態を、炎症性腸疾患(IBD)を中心に研究する。 (全2単位 1回2時間 15回)	
	動物看護倫理・教育学特論	(9 牧野 ゆき)動物看護専門職としての倫理観や動物看護観を構築するため、現状の把握と取り組むべき課題の明確化を試み、動物看護倫理の中心課題である獣医療におけるケアのあり方を追求する。また、動物看護教育の役割として、動物看護専門職の資質能力の一層の向上を図ることで動物と人間の福祉に資することが求められていることを踏まえ、看護教育者の能力の向上、臨床実習指導、継続教育等の現状と課題について取り上げる。 (全2単位 1回2時間 15回)	

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床 獣医 保健 看護学 分野	動物行動学特論	(12 水越美奈)コンパニオンアニマルが我々の心身の健康にいかによりポジティブな影響を及ぼすかについての研究が累積されつつある一方、問題行動を理由に安楽死処分される動物も少なくない。動物福祉とエビデンスに基づいた問題行動の診断と治療、および予防に関する研究を行ない、問題行動の予防を実践・教育できる動物看護専門職の養成を目指す。(全2単位 1回2時間 15回)	
	臨床検査学特論	(13 皆上 大吾)近年、獣医療の進歩、動物飼育に関する意識の向上、さらには動物医療保険の発展により、伴侶動物に対しても様々な検査を実施することが可能となってきた。それに伴い、より侵襲性が低く、より感度の高い検査法の確立が望まれている。本講義では、動物において応用されている様々な特殊検査法について紹介すると共に、新規検査法として注目されている遺伝子検査法を取り上げ、最先端の臨床検査を実施・開発するための基礎的知識を養成する。(全2単位 1回2時間 15回)	
	臨床獣医保健看護学特別演習	<p>(概要) 伴侶動物の各種疾病の病態病理、分子病理、臨床検査、看護診断、援助技術、生命倫理などに関する内外の文献を抄読し、研究・実証手法の検証や模擬演習を実施する。研究成果のまとめ方、発表方法を修得させる。担当教員が研究対象としている疾患を主体に多様な立証技術や思考を指導する。 (オムニバス方式/全4単位、1回4時間 計30回開講)</p> <hr/> <p>(2 左向敏紀/16回)伴侶動物の各種材料から動物体に起きている病態を把握する技術を習得し研究への応用も含め指導する。血液成分からは各種腫瘍細胞の検出方法を習得する。血清診断では、微量の各種ホルモンの測定、脂肪組織から分泌されるアディポサイトカイン、腫瘍マーカーの測定、バイオプシーサンプルでの組織検査を習得する。また、各種サンプルから遺伝子発現を確認して診断への道を探る。ストレスマーカーとしてのホルモン、各種代謝産物の測定を習得する。</p> <hr/> <p>(3 湯本典夫/14回)演習は伴侶動物を主対象動物として、病態病理学、臨床病理学、分子病理学、臨床検査学に関する原著論文を題材に用いる。題材の発表後、研究の意義、今後の展開、最新の技術や研究方法に関する知識を討議によって得る。題材項目は、1)腫瘍の病理組織学、臨床細胞学に関する項目、2)リンパ球系抗原に対する抗体の組織診断への応用に関する項目、3)病理検体の分子病理学的検索への応用に関する項目からなる。</p>	オムニバス形式

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床 獣医 保健 看護学 分野	臨床獣医看護学特別研究	<p>(概要)臨床獣医保健看護学特別研究では、臨床看護において重要な疾患の病態機序解明、栄養学的研究による予防医学、さらに異常行動などをそれぞれ分子レベルで解析することにより基礎研究から臨床応用を目指した臨床看護学研究を実施する。下記に具体的な研究内容を示す。 (全8単位、1回6時間計60回開講)</p>	
		<p>(2 左向敏紀) 伴侶動物における獣医療は高度化、伴侶動物の高齢化に合わせた看護学の発達に見合う人材輩出、学問体系を目指す。 1) 糖尿病動物、代謝性疾患および内分泌疾患に対する管理に関する研究、 2) 糖尿病動物の診断および治療指標に関する研究、 3) 疾病動物、老齢動物および肥満動物に対する栄養管理の研究、 4) 疾病動物、老齢動物、腫瘍動物および肥満動物における遺伝子を含む各種検査マーカーの研究、 5) 行動異常および疾病動物におけるストレスマーカー変動に関する研究 6) 動物に対するサプリメント、健康補助食品の作用に関する研究 7) 消化器疾患とくに炎症性腸炎 (IBD) に対する治療・看護に関する研究</p>	
		<p>(3 湯本典夫) 伴侶動物を対象にリンパ増殖性疾患の発症のしくみ、生体の応答、組織発生について、病理形態学、分子病理学的に研究を行っている。 1) 悪性リンパ腫の細胞形質と遺伝子発現の比較研究 2) 腫瘍診断への分子病理学的検索の応用 3) 抗腫瘍免疫療法における腫瘍細胞の形質変異に関する研究 4) 外科病理診断に関する研究</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別講義	<p>(概要) 獣医保健看護学の教員・研究者養成に相応しい、自然科学、生命倫理、動物愛護、法令等に基づき、今後の獣医保健看護学の在り方、その教育の方向性等を総合的に詳細に教授する。(全4単位、1回2時間計30回開講)</p>	オムニバス形式
	<p><福所秋雄>産業動物における感染症の予防・処置(防疫)の考え方:コンパニオンアニマルにおける感染症の予防・処置の相異を基盤として、獣医保健看護学における微生物学・感染学・疾病防除学の重要性を現場の状況に立って教授する。</p>	
	<p><左向敏紀>代謝疾病看護:代謝性疾患を持った動物たとえば糖尿病、副腎皮質機能亢進症、電解質異常などを持ち合わせた動物に対する看護は通常の看護に比較して気をつけて行わなければならない。入院時および緊急対応時に注意する点を各疾患ごとに解説すると共にどのような考えで理論構築するかを示す。</p>	
	<p><湯本典夫>疾病論:動物の各種疾病に対応して、生体内でおこりうる生理学的機能変化、病態によって出現するさまざまな症状、さらにその治療法や病因について講義し、動物看護援助の展開、教育の実践に役立てる。</p>	
	<p><梶ヶ谷 博>人工環境共生論:野生動物の中でも環境指標動物として価値の高い野鳥を題材に、日常的な様々な事例から、人工的な環境への適応とその意味、バードストライク論の実像と虚像、野鳥保護論等について事例提示をし、またそれらに対する各自の意見交換をすることにより、文明社会に生きる人類と野生動物との共生の在り方を考察する。</p>	
	<p><袴田陽二>ライフサイエンス研究の目覚ましい進歩は人間の平均寿命を飛躍的に延ばすことに成功したが、その一方で多くの実験動物の命が犠牲になってきた。本講義では、動物看護における実験動物学ならびに動物実験の役割について学ぶ。</p>	
	<p><近江俊徳>遺伝性疾患を惹起する責任遺伝子は種を超えて保存されている場合が多い。本講義では、ヒトの遺伝性疾患疾患に関する最先端の知見を紹介し動物遺伝看護学への応用について議論する。</p>	
	<p><小林真理子>野生動物が環境の現状を反映しているという観点から、様々な野生動物を指標としたモニタリングの試みが行われている。本講義では、このような生物モニタリングの意義、現状、問題点などを取り上げ、環境汚染の指標としての野生動物の有用性を講義する。</p>	
	<p><石岡克己>伴侶動物を対象とした獣医学研究は今や人間の医学研究との共同作業が進み、分子生物学をはじめとする多くの手法が応用されている。その一方で、動物種としてのヒトにはイヌやネコとは異なる部分も多く、その違いを正しく認識することもまた重要である。本講義では、獣医臨床領域における“Translational research”の考え方について概説する。</p>	
	<p><牧野ゆき>獣医療における法的諸問題、インフォームド・コンセントのあり方、獣医師・動物看護職・動物間の相互関係および獣医療におけるコミュニケーションのあり方等について現状と課題を学び、獣医療において動物看護職が果たすべきケアのあり方を考える。</p>	

授 業 科 目 の 概 要

(獣医生命科学研究科獣医保健看護学専攻)

授業科目の名称	講義等の内容	備考
特別講義	<p>〈青木博史〉生体(動物およびヒト)は長い進化の過程で感染性病原体に対する防御機構を進化・発展させたが、病原体もそれらを突破する戦術・戦略を築き、巧みにかいくぐることで対抗してきたと考えられる。本講義では、分子生物学的スケールから社会的スケールまで範囲を広げて、生体と病原体との攻防、感染症の発生病因および予防・克服法について考察する。</p>	
	<p>〈山本俊昭〉動物生態学特論: 世界各国で起きている野生動物を取り巻く問題について事例を挙げて理解を深め、野生動物の保護管理に対して生態学がどのように関わることができるのかを講義する。また近年、野生動物の生態調査方法が進展しており、それらの成果を示すとともに、課題について議論する。</p>	
	<p>〈水越美奈〉動物には様々な個性が見られ、こうした個性は遺伝的な要因と環境要因が相まって形成される。性質の個体差は正常範囲であれば個性として認識されるが、過度に表出すれば加療の対象になりうる。ヒトと動物の適正な共存関係を構築する上で特に重要であり、将来の問題行動を予防する鍵と考えられる初生期環境の影響について考察する。</p>	
	<p>〈皆上 大吾〉獣医療の進歩と共に伴侶動物の高齢化が進み、人と同様に死亡原因として腫瘍性疾患が高い比率を占める様になってきた。本講義では、伴侶動物の腫瘍性疾患に関する最新知見を紹介すると共に、がん克服のための様々な戦略について考察する。</p>	